

「戦争は過去のものとした時代に私は生きてきました。しかし現実の過去、例えば2幕のマニラ舞台での虐殺、マニラ湾攻撃も想像を絶する酷さで、このオペラの様なものではなく、音楽にも絵画にも物語にさえることが憚られる出来事でした。この僕の生きた時代の醸し出す様な軽さを装った作品であっても、書き込むときには激しい痛みを憶えました。人は過去から学べないと感じさせる昨今ですが、私は自分を育てた両親、時代、環境、総てを描きおこざるを得ない愛と命の有限さを舞台作品にしました。

これって、一度むけばあなたの内面と寸分の違いもないはず」

井上道義

あ  
ら  
す  
じ

#### 【第一幕】 絵描きの朝

1970年代の日本。タロー（工藤）は、海岸近くのアトリエで、朝から理想に燃えて（思うままに描くぞ）と絵筆を走らせている。そこへモデルのマミ（宮地）とエミ（鳥谷）がやってくる。個性の違う二人は、ぶつかりながらも明るく嬉々として【衣食のワルツ】を歌いあう。絵を描きながら、次第に夢想し始めるタロー。彼の目には、散らかったアトリエを徘徊する少年（鈴木）が見えてくるが、モデルたちには見えない。少年は、タローの分身であり、過去と未来を繋ぐ愛のキューピット。彼がタローの描いた両親の肖像画を持ち出してくると、そこから二人が亡霊のように立ち現われる。全てはタローにしか見えないのだが、不穏な空気を察したモデルが絵に近づくと、乱雑に置かれたものが、バランスを失い崩壊……タローの上に重く、のしかかった。

すると、アトリエの額縁、絵の具、庭の鳥たちもが、歌い出し、時空はポルカの様な行進曲と共に、戦時中、正義とみちこがいたマニラへと移っていく……

（休憩）

#### 【第二幕】 マニラ

1945年国際都市だったマニラの街中。冷房もない時代、夜、家のベランダでは、正義（大西）が友人たちと酒を片手に談笑しながら、彼のお気に入りフィリピン娘ピナ（コロン）とダンスを踊っている。戦時下、日系二世としての不遇な自分を嘆く正義に、今がすべてよしまなくては、と歌う【ピナのバラード】。ピナの友人が竹を持ち出しダンスにしばし興じ、【毎日が夏だ〜】と戦争で自由の奪われた日々をデカダン風に歌い合う。そんな人々を傍らで優しく見守るみちこ（小林）。そこ

へ、男女の言い争いが始まる。女はなんとピナ。拳銃を盗んだからだったが、正義が上手くとりなし騒ぎを治めると、みちこは【そろそろ家に】と促す。だが正義は【愛悩一途 I know it】〈国をまたぐ俺に家と呼べるものはない〉と逃げながら、酒と人々の狂騒に身をゆだね、友人たちと【アブラ食む(ハム)】の合唱で大盛り上がりとなる。

そこへ突然、米軍の艦砲射撃で周囲は大爆発! 人々が【逃げろニゲロ】と右往左往する。何人かは亡くなり、瀕死の重傷を負った正義と共に傷ついた人々の上に天から「戦争終結!」のピラが舞い降りる。生き残った人々は【ああ、助かった】と安堵するが、正義は、セイギとは? 勝ち負けとは? と息も絶え絶えに【降伏の正義】を歌う。そこへ、混乱ではぐれていたみちこが、上陸してきた救護の米兵(Yury)を連れてくる。正義を何とか助けた二人だったが、極限状態の中、何故か強く惹かれあうのだった—

### 【幕間朗読】

タローの出生の秘密が、一人二役の朗読(大山)によって語られる。

### 【第三幕】第一幕と同じ日、同じ場所

タローがモデルたちの絵を描いているとベルが鳴り、老夫婦が入って来る。今度は本物のタローの両親=正義とミチコだ。二人は、若い頃の肖像画を見つけて、モデルたちと話を始めるが、過去の記憶には触れられたくないらしい。若い彼女たちにはそれが分からず話しかけてくるので、みちこは思わず本音の言葉を吐き出し始める。正義もまた、レチタティーボ【ああタロー】、正義のアリア【神様仏様】と本心をぶつけ、互いに赦しあう光明を見出す。タローは、芸術の中にこそ生きる意味があると【エロスの道行】をエネルギッシュに歌い、【火焰土器の音楽】へと続くが、市井の人々からは、【絵空ゴット】と揶揄されるのだった。しかし、彼の目前には、子どもの頃から泳いできた絵画と音楽の大きな海原が広がる。タローは、愛とは自分を赦し、相手を赦す行為の中にあることを悟り、父親の生き様を肯定し、愛も芸術も爆発してこそその存在だと【正義への献呈歌】を祈るように歌う。【オペラへの奉納唱】(讚美歌461)が、彼岸の世界へ向かって満ち潮のように迫り、幕となる。

[オーケストラ編成]フルート2(ピッコロ2持替)、オーボエ2(イングリッシュホルン持替)、クラリネット2(バスクラリネット持替)、ファゴット2、サクソフォン(ソプラノ、アルト、テナー)、ホルン4、トランペット2(ピッコロトランペット持替)、トロンボーン2(バストロンボーン持替)、指揮者(拍子木)、ティンパニ、吊しシンバル、シンバル、ハイハット、アンティークシンバル、タムタム、ウッドブロック、ギロ、トライアングル、マラカス、フレクサトン、ハンマー、カスタネット、バンブーチャイム、鞭、木魚、キン、運動会用笛、効果音(風、波)、ビンザサラ、サイレン、チャンチキ、締太鼓、鉦、タンバリン、ボンゴ、小太鼓、大太鼓、シロフォン、グロックンシュピール、ヴィブラフォン、チャイム、アンヴィル、ハープ、ピアノ(チェレスタ)、弦楽5部。

■総監督(指揮/脚本/作曲/演出/振付)  
井上道義

■照明  
足立 恒/(株)インプレッション

■映像  
力石友弥/antymark annex

■映像操作  
(株)ワンハーフスタジオ

■美術コーディネーター  
かくはま ゆか

■デフォルメオルガン画・衣裳ペイント  
ハラダチエ

■音響  
山中洋一

■効果音制作  
佐藤 航

■衣裳製作協力  
榑原 敏/アーム・ピー・エス

■舞台監督  
堀井基宏

■演出助手  
橋詰陽子

■字幕操作  
アルゴン社(サントリーホール公演のみ)

■副指揮  
辻 博之

■プロダクションスーパーバイザー  
大山大輔

■プロダクションアシスタント  
渋谷陽子

■コレベティトゥア  
服部容子、山下百恵、白木麻祐子

■舞台監督助手  
近藤 元、吉岡絵梨花

■制作進行  
中村光宏/センターヴィレッジ

■大道具製作  
東宝舞台

■ヘア・メイク  
丸善

■企画制作  
KAJIMOTO

[第1幕/第3幕]



[絵描き]

タロー (テノール) ●工藤和真



[モデル]

マミ (ソプラノ) ●宮地江奈



[モデル]

エミ (メゾ・ソプラノ) ●鳥谷尚子



[タローの分身]

少年 ●茂木鈴木

正義 (バリトン) ●大西宇宙

みちこ (リリック・ソプラノ) ●小林沙羅

額縁の声 (バスソプロフォンド) ●石塚 勇

絵の具の声 (テノール) ●斎木智弥

鳥の声 1 (コロラトゥーラ・ソプラノ) ●中川郁文

鳥の声 2 (ソプラノ) ●太田小百合

[第2幕]



[タローの父 (日系2世)]

正義 (バリトン) ●大西宇宙



[タローの母 (日本人)]

みちこ (リリック・ソプラノ) ●小林沙羅



[フィリピン娘]

ピナ (ソプラノ) ●コロリエリカ

[正義の友人たち]



久美 (ソプラノ)  
●中川郁文



由利 (ソプラノ)  
●太田小百合



領事夫人 (メゾ・ソプラノ)  
●蛭牟田実里



ボテロ (メゾ・ソプラノ)  
●芦田 琴



藤原 (テノール)  
●斎木智弥



仁木 (テノール)  
●渡辺正親



山田 (バリトン)  
●今井 学



中村 (バリトン)  
●高橋宏典



ゲリロ (バス)  
●山田大智



セイギスカン (バス)  
●仲田尋一

摩耶子 (ソプラノ)  
●宮地江奈

優子 (メゾ・ソプラノ)  
●鳥谷尚子



米軍救護班 (ダンサー)  
●Yury Selezen



幕間朗読  
●大山大輔

[洗足学園メモリアル合唱団]

ソプラノ	木村朱李	宮川実生
アルト	宇根渚美子	中原櫻乃
テノール	川内 悠	熊野義貴 (日本兵B)
バス	藍 実成 (日本兵A)	佐藤志有

## 井上道義の作曲について

井上の作曲は、1997年、〈東洋と西洋の融合〉をテーマに、野村萬斎が足利義満公復活の創作劇を演じた第10回音舞台において、コラージュ的な音楽、交響詩「金閣」を創作したことに始まる。続いて、2001年、開眼21ガラコンサートにて「鏡の眼」op. 2という16分の大編成オーケストラ作品を発表。「道義を鏡にうつしたようなものでもある」と本人が語る通り、自伝的作品の第一作目と言える。2004年、新日本フィルの定期演奏会にて「メモリーコンクリート」op. 3を発表。曲中の〈指揮者の為のカデンツァ〉は、「指揮者が音楽以外の何かをする」部分で、実際に井上も、釣り竿を取り出し下駄を釣り上げたり、タップダンスをしたりと、演奏する度に様々なパフォーマンスを披露した。

以後、自伝本の執筆を進める中、数奇な運命を辿った両親のドラマのような人生を再発見し、是非オペラ化するべきだと感じるようになり、自ら台本を書き始めた。しかしその筆は遅々として進まず、最終的には、取りかかりから15年以上の月日を費やした。この間、咽頭癌の病に倒れ、指揮者としても半年の休養期間を取ることを余儀なくされたが、闘病を支えた一番のモチベーションは、「このオペラを完成させなくては死ねない」という強い想いだったという。

## ■ ミュージカルオペラ

### 『A Way from Surrender~降福からの道~』op. 4

オーケストラの編成は、8・6・4・4・4の2管編成。サクソフォン、ピアノ・チェレスタ、そして打楽器群が彩りを広げる。因みに、題名の「降福」という言葉は、戦後70年余りに渡る平和とその基盤の危うさを表す、井上の造語である。

今回、すみだトリフォニーホールでは、井上が名付けたという〈コンサートオペラ形式〉で上演される。井上曰く、「簡単に言えば、お客さんからオーケストラが見えるオペラ」で、暗いオケピットに入り音楽を奏でるだけの有能な黒子ではなく、オーケストラは、視覚的にもスポットライトが当たる存在であるべきだという態度だろう。

もう一つ、注目されているのが、〈ミュージカルオペラ〉という言葉だ。井上本人も悩んだ末に付けたものだという。ミュージカルは一般には、聞きやすいリズムやメロディーの音楽でダンスに歌と台詞がつき、歌手もマイクで、電子楽器による演奏も多く、基本的に生音で奏でる「オペラ」音楽とは一線を画する。今回は、芝居的な部分や「囁き声」を求めることもあり、(トリフォニーホー

ルでは) 主役たちがマイクを付けることを予定している。一方で、基本的にはオペラ歌手によるベルカントな歌を根幹としながら、翻訳や和製のオペラで散見されるような日本語の響きを無理矢理オペラティックな発声で変形させることを極力避けているという。また、「僕は指揮者なので、やはりオーケストラが中心の作品」と言うように、歌詞を伴わないオーケストラの音楽そのものが、表現の大きな担い手となっている点では、実は「オペラ」と呼ぶに相応しいと思われる。

ただもう一つ、本人がオペラと呼ぶことを躊躇した理由は、その作曲姿勢にあるかもしれない。井上は、指揮者としてのキャリアに裏打ちされているせいか、「僕の作曲は様々な(引用)の嵐だが、それは生きてきた環境の中に存在していたものなのだから全く恥ずかしくない」と言い切る。これまでの井上作品がそうであったように、今回も、井上自身を包み込み血肉となったあらゆる音や音楽を、作曲する上でのモチーフとしたり、解読され易いまま引用したりしている。それは、バッハからベートーヴェン、ドビュッシーやワーグナーをはじめ、ブルグミュラーや童謡、更には昭和初期の流行歌、チンドン屋や阿波踊りのリズム、リパブリック讃歌(CMソング)、讃美歌に至るまで、非常に多岐に渡る。それらが、井上独自のメロディーと渾然一体となり、1つの大きなドラマを作り上げたのが今回の作品と言えるだろう。ショスタコーヴィチの技法を真似て(音名)を利用したものや、(階名)を利用したダジャレ音型も多い。とりわけ、役名「画家のタロー」からは、日本人ならば〈太陽の塔〉の制作と「芸術は爆発だ!」の台詞で知られる岡本太郎を想起するだろう。実際、舞台上には、岡本がその価値を再発見した〈火焰型土器〉も置かれている。が、これもまた1つの引用であり、岡本のアートに対する言葉には大いに感化を受け、共感を抱いてきたという井上が、自分自身のイメージを岡本に仮託したと理解する。

最後に、この作品のテーマについて少しだけ言及しておきたい。井上は、自らの原点が「(疑う)ことを常としている」と語る。疑うことの先にこそ、真実が見えてくるという姿勢だろう。その見える真実は決して1つでなく「1つを選ぼうとするから戦争が起こる」とも話す。セイギにも、勝者と敗者の正義があるように、赦すことが赦されることであり、生きることが死ぬことでもある、この日常に潜む表裏の論理は、この世の全ての人に共通するものである、と赤裸々に具現化したのがこの作品なのではないだろうか?

プロダクションアシスタント 渋谷陽子

## 幸福=肯定?

自分を肯定できるということが、自分を幸福と思える唯一の条件だと僕は思っています。ただし人さまにも神さまにもどう思われても良い!というくらい強い強い「自分の主観での肯定」でないと意味がないのですが。

でも、言うは易く行うは難し。他人に無視や反対をされては、「私はこれで良い!」となかなか考えにくい。なにより肯定の前提の「自分の主観」を持つことが大変だ。僕は五十年をそのために費やした気さえする。十四歳であれ六十四歳であれ、生きている限り欲望が生まれ、その裏返しとして将来への不安、社会とのあつれき、家族や友人知人恋人との誤解や不信も生まれ、「安心する」ことは困難だ。安心、すなわち自分の心を安らかにとらえられるか? 社会的に成功していても一度むけば心が病気になる人は多い。僕の父、正義はその最右翼だったかもしれません。

彼は広島から米国へ移民した祖父の息子でした。頭の回転も羽振りもよかった父ですが、内面はアメリカでもなく日本でもなかった。故郷はどこにあると言えず、日本語も書けなかった。戦争が始まり、収容所に入れられかねない米国から「来日」、母と社内結婚。しかし日本では英語の短波放送を聞くだけでスパイ扱い。移住したフィリピンでは米軍に追われ、母とジャングルに四ヵ月、死戦をさまよった。戦後、命からがら帰国した日



本で、じきに授かった赤ん坊が僕だ。僕にとっては、日本でも米国でも欧州でも豪州でも、自分を生かせる場所こそが住む所。「日本人」として自分を定める根拠は「母国語が日本語」、今もそれだけ。あなたは「なぜ自分が日本人と言えるか?」という問いに何と答えますか?

井上道義

『降福からの道 欲張り指揮者のエッセイ集』  
(三修社刊)収録